

〈調査報告〉

黄土高原のイスラーム（一）

——二〇〇三年～二〇〇四年保安族・東郷族調査報告——

Islam in the Loess Plateau of Northwest China (1)

楊 海 英

民族学者の生活と仕事のもつ諸条件は、長い期間、民族学者を彼の属する集団から物理的に抜き取ってしまう。彼が身を曝す変化の激しさによって、彼は一種の慢性の故郷喪失症にかかる。もはやどこへ行っても、彼は自分のところにいるという感じがなくなる。彼は心理的に不具者になってしまっているのだ。（レヴィ＝ストロース「どのようにして人は民族学者になるか」『悲しき熱帯』上）

私は中華人民共和国出身のモンゴル人で、中国では「少数民族」の身分だった。文化人類学を学び、主としてモンゴル・テュルク系社会内でフィールド・ワークを続けてきた。最近では、特に同じ少数民族の立場にあり、かつモンゴル語系の言葉を話す保安族^{ポイナン}と東郷族^{トシヤン}にも興味を抱きはじめた。以下は、保安族と東郷族社会内における調査報告である。

目次

一	イスラームの黄土高原	三五
二	西北独特のスーフイズム	四八
三	保安族の居住地	五六
四	語りつがれる保安族の歴史	七一
五	保安族社会内のスーフィー教団	八四
六	東郷族社会のイスラーム―北庄門宦	九九
七	胡門門宦	一二〇
八	東郷族社会内の他のスーフィー教団	一三二
九	東郷人社会からスタートした新教イフワーン（伊赫瓦尼）	一四七
一〇	調査の終幕	一五六
一一	結びに代えて	一六三

一 イスラームの黄土高原

傲慢な調査者という自覚

奇跡の前で科学はほとんど荒唐無稽に見える。この黄土高原はまさに宗教の棲家である。イスラームはここで中国式の、黄土高原式の、貧しい異郷人の唯一の精神的な支えとなった。

中国北西部に位置する乾燥した大地をこのように表現したのは、回族出身の作家張承志だ¹。彼はこの黄土の大地を「宗教的な黄土高原」、「イスラームの黄土高原」と呼んだ²。

黄土高原の「中国ムスリム」と称する人々には回族、保安族、それに東郷族などが含まれている。そのうち保安族と東郷族については、中国内モンゴル自治区のモンゴル人やモンゴル国の人たちは「モンゴル人ムスリム」ないしは「モンゴル系の民族」だとみている。漢文文献のなかでも古くから「蒙古回回」や「回回蒙古」の形で現れる。現在の中華人民共和国の国家的な権威を背景にして編纂された『保安族簡史』と『東郷族簡史』もこの二つの集団を「イスラームを信仰するモンゴル人を中心に形成された民族」で、「両民族とも「アルタイ語系モンゴル語族の言葉」を話すとしている³。

私はこのいわゆる「モンゴル系のムスリム」たちの実態を知るために、二〇〇三年一月一八日から二〇〇四年一月六日にかけて、現地調査をおこなった。以下、私はこの三週間のなかでみたこと、聞いた話をなるべく従来の研究成果とも併せて報告したい。

イスラームの東方への広がりにはモンゴル帝国の対外拡大に沿った結果であることは今や学界の常識となっている⁴。私は

モンゴル人ではあるが、このような学界の常識を民族の過去の栄光だと認識する自民族中心主義者ではない。往時の大モンゴル帝国を過度に美化するつもりも毛頭ない。ただ、東方のムスリム社会の実態をきちんと調べたい気持ちだけは以前からあった。私は今回の調査で、中国のような東方世界にムスリム社会が誕生したのはモンゴル帝国の遺産のひとつだ、ということを保安族や東郷族の知識人や宗教的エリートたちの前で言ってみた。何故かというと、歴史は民族の形成と起源認識に直接関係しているからである。その結果、彼らもモンゴル帝国とイスラームとの関係について多くの知識をもっていることが確認できた。彼らの何人かは調査者の私がそれを言う前に、私がモンゴル人だと分かったときに、「われわれの祖先はモンゴル帝国時代に来たものだ」、「モンゴル人とは親戚だ」と表現し、調査者の私を快く受け入れてくれた。モンゴル人と称して現在を生きる個人は、どうしても物事をモンゴルと称された集団の過去の歴史と結びつけて考える習慣から脱出できないでいる。

実際のところ、「貴方たちはモンゴル帝国時代に来た人々の子孫だよ」という言い方をするモンゴル人の姿勢は傲慢だと思っている。それでも、言ってみて彼らの反応をみたかった。というのは、保安族や東郷族の人たちのアイデンティティは一九八〇年代から少しずつではあるが、確実に変わりはじめたからである。二〇〇〇年夏のある日、私が内モンゴル自治区西部のアラシャン地域でモンゴル人ムスリムについて調査していたころ、ひとりの東郷族の導師イムムに出会ったことがある。甘肅省河州（現 臨夏）地域出身で、東郷人の彼は、モンゴル人ムスリムのあいだで布教をしていた。彼は「東郷人もモンゴル人もみなモンゴルだ」と主張しながら、宗教に対する社会主義の締め付けが緩くなった一九八〇年代に、自らの族籍をモンゴル族から東郷族に戻していた。その理由は極めてシンプルで、「東郷族はムスリムだから」、との一点だった。⁵つまり、モンゴル語系の言葉を話す彼らは密かにではあるが、イスラームへ回帰しているのではないか、と直感したのである。

それだけではない。保安族や東郷族のエリートたちのなかには、従来の「イスラームを信奉するモンゴル人を中心に形成された民族」という定義に異議を唱える人々が増えてきている。モンゴルのな色彩を消し、現在定着している民族名称も改めるべきだとの主張も現れた⁶。何故、このような変化が生じたのだろうか。

民族はすべて「想像の共同体」である、とアンダーソン流に簡単に帰納する見方はあろう。このような見方に一番欠如しているのは歴史性のことであろう。歴史と民族形成の関係を考えた際に、どうしても「モンゴル帝国の遺産としての東方イスラーム」という説が頭に浮かんでくる。そこで、私は敢えて「傲慢な調査者」を演じ続けた。このような「傲慢な調査者」に対して、保安族や東郷族の人たち、それに回族の人たちは一概に寛容的であった。彼らもこの学界の通説を受け入れたうえで、あるいは知っているうえで自己主張をした。私も当然彼らの主張には真剣に耳を傾けた。

「傲慢な調査者」を演じたことにより、私は今回の調査がかなりうまくいったと自負している。調査者の私が自分の本音を曝けだすことによって、彼らの本音がある程度聞くことができたと思っている。もちろん、彼らがすべてを私に包み隠さずに語ったことを意味しない。時間的にそれは不可能である。異教徒に口外しないことだって沢山あるはずだ。モンゴル人も保安人も、それに東郷人と回族も、みな中国という巨大な国家のなかの少数民族だということ、日々の暮しにもすべてマイノリティであることが投影されていること、つまり、調査者と被調査者の双方とも国家内では少数者の立場にあるということが、私と彼らとの距離を縮めることができたのである。

「心と霊」に近づくための旅

私は今回の実地調査を最初から「心と霊に接近するための旅」と位置づけていた。研究において、「心と霊の問題」を強烈に主張したのも、やはり作家の張承志である。祖籍は山東省でも生まれは北京の張承志は回族のひとりである。「文化大

革命」のさなかの一九六八年から、彼は下放青年として内モンゴル自治区のウジユムチン草原で暮した⁷。彼はそのときに生活をともにしていたモンゴル人一家をずっと家族と見做し、無限の愛情をこめて度々自らの作品に登場させている。その後彼は中国蒙古学会会長で、碩学の翁獨健の弟子となり、歴史・考古学の訓練を受けた。学問という研究手法の限界を感じたためか、作家として人間の生き方と精神世界の探求に重心を移していった。作家として成功していく過程は同時に彼がムスリムとして自覚し、それも殉教精神を尊ぶイスラーム神秘主義（スーフイズム）の一派、ジャフリーヤ派への精神的な接近のプロセスでもあった。俗にいう「西海固」地区、つまり寧夏回族自治区の西吉、海原、固原三県に住む貧しいムスリムたちとの生活経験から、中国イスラーム特にジャフリーヤ派の苦難と殉教の歴史を彼は一九九一年に『心霊史』として書きあげた。中国のある青年学者は次のように評している。張承志はムスリムの一員としてスーフイー内部の核心に直入し、悟りを得た。彼はイスラームの生き生きとした生命力とあり方に震撼し、敬服をした。そして、彼は孔孟思想を主流とする文化への反撃を始めた、という⁸。

『心霊史』は中国のムスリム社会とりわけ回族社会からは巨大な反響を巻き起こした。黄土高原に住む回族のムスリムたちはみな涙を流しながら『心霊史』を読んだ⁹。十数年たった現在、『心霊史』を中国の大学生の必読書に指定する研究者も出ている¹⁰。そして、作家張承志とその作品を研究する学問、いわゆる「張承志学」が誕生した¹¹。

『心霊史』の日本語改訂版である『殉教の中国イスラーム』のなかで、張承志は自らの執筆方針を次のように語っている。

正しい方法論とは、信仰する教徒たちに保持されている生き方そのものの中にあるのではないか。旧式の歴史叙述の方法に頼っては、そうした教徒たちの思いをつぶすことになる¹²。

私はこの「生き方」という表現に魅了された。今までに読んだ活字のなかで、これほど輝く言葉は少なかった。どんな学術的なタームを並べても、私がつきあってきた人々、モンゴル人だろうが、カザフ人だろうが、あるいは漢人だろうが、彼らの真の思いを伝えることができたかどうか、常に不安だった。学術という営為は資料を根拠とする。しかし、人々の思いがすべて資料となってそこらへんに転がっているわけではない。中国では少数民族の^{マイノリティ}一員、日本では外国人である^{アウトサイダー}私だが、自分と同じく弱い立場にいる人々の思いを強調したとき、「非客観的」とみられることがある。京都大学の歴史学者杉山正明が歴史上のモンゴルについて、「大モンゴル」や「モンゴルの時代」と楽々と表現できても、私は躊躇しなければならぬ。モンゴル人の口から客観的に「大」や「時代」が出てきても、それは危険である。中国では分離独立指向のある「民族主義者」とされるし、日本では「自民族中心的」で、「非客観的」とみられるかもしれない。したがって、マイノリティの一員である私がモンゴル学者として、モンゴルを対象に、生き方を追求するときは慎重でなければならない。それでも、私は生き方の探求こそ人類学の目的のひとつだと認識し、¹³今回、調査対象をモンゴルから保安族や東郷族に広げたのである。

今回の調査のなかで、私は極力彼らの生き方の方に近づこうと努力した。異教徒の私にどれほど本音を吐露してくれるか不安は残る。たとえ彼らの話が極めて表面的で、礼を失することなく彬々としたものであっても、多様なムスリム社会の一端を伝えることができれば、それで充分だ。ムスリムたちとつきあうのは、今回が初めてではない。一九九一年から一九九三年まで、毎年のように新疆ウイグル自治区で調査したことがある。新疆ウイグル自治区に住むカザフ族やウイグル族、それにウズベク族もみなムスリムだ。ムスリム社会で守らなければならない基本的なことは知っているつもりだ。それでも、いささか心配だ。というのは、今回は、心と霊への接近を目指しているからだ。

人類学はもともと心を見つめる学問ではない。レヴィ＝ストロースは『悲しき熱帯』のなかで、人類学は人々の心の問

題にも対応する必要があると語っていた。一口に「中国ムスリム」といっても、その実態はさまざまだ。異教徒の私を彼らは果たして受け入れてくれるのだろうか。どこまで本音を語ってくれるのだろうか。今回の旅で、少しでもイスラーム社会の一端を伝えたい。

イスラームが定着した環境

甘肅省の省都蘭州へ飛ぶ飛行機は約一時間遅れて午後一五時四五分に北京空港を離陸した。まもなく西北中国の黄色い大地が眼の下で見えてきた。黄土の大地は実に細かい粒子からなっている。粒子は北西風に巻きあげられて、空はずっと霞んでいる。

一八時前に飛行機は蘭州市西北の中川機場の上空に着いた。灰色の山々の上空を旋回しながら、着陸の態勢に入った。私は思わず黄土高原を描いた張承志の言葉を思いだした。¹⁴

すさまじいまでの山岳風景。人びとはたくましい。神秘主義すなわちスーフィズムのほかには、この地にふさわしい力は存在しない。知識人はそれに対して無力であった。それゆえに、この宗教的な黄土高原は外界に理解されてこなかった。

私はムスリムではないが、張承志の言葉には共鳴できる。日本列島のように森林に覆われた山々よりは人間的に感じる。森林の山々には万物の霊も宿る。だから、森は恐い。木立の少ない黄土高原の山々はどことなく人間的である。

中川機場は蘭州市から西北に八〇キロも離れたところにある。空港を出ると、あたりはすっかり暗くなっていた。夜の

黄土高原の道をひとりでタクシーに乗って走るのは止めようと思った。山道が恐いのではなく、安全が気になる。どこかの村に入っておけば恐いものは何もないが、目的地までの道中が恐い。大型のリムジンに乗りこむ。下り坂になると、運転手はエンジンを切る。「お金はガソリン節約で儲かるものではない」と南国の広東人らしいグループもカラ・ブレイキに抗議するが、効き目は全くない。金持ちの広東人もタクシーではなくリムジンを選んでいいるから、説得力がない。いや、五く六〇代生まれの中国の運転手はみなそういう風にかラ・ブレイキで下り坂を通る。これも一種の文化にちがいない。私はこの夜、蘭州大学の外国人教師用の宿舎で過ごした。設備も悪くないし、一晚二〇〇〇円くらいで泊まれるから、安い。大学構内は安全で、静かだ。それに私は蘭州大学出版社の本を買いたかった。構内には必ず本屋がある。最新の研究情報を知るためには本屋に行くのが一番だ。

宿舎では外国人教師や留学生たちが少し早いクリスマス・パーティーに興じていた。チェックインしてから大学を出る。学生街で「清真蘭州牛肉ラーメン」を食べる。一杯五〇円にもならない。「清真」とはムスリムの経営を意味する。蘭州人にとって「蘭州牛肉ラーメン」は欠かせない存在だ。一日三食だけでなく、おやつもラーメンでなければならぬ、というジョークがある。この「蘭州牛肉ラーメン」の主な担い手はムスリムたちだ。ラーメンを食べているあいだ、小学生くらいの男の子が、香港の俳優レスリー・チャン（張国榮）が自殺した日にちについて、店主の親父さんと話しあっていた。遠い香港の芸能界の出来事に、回族の少年は興味を抱いているようだ。

麻薬と天下第一の市

保安族も東郷族も甘肅省西部の臨夏回族自治区に住んでいる（地図1）。特定の地域における少数民族の自治を認める中国において、自治という名が冠したさまざまな行政組織が存在する。モンゴル族、チベット族、ウイグル族、回族、チワン

族はそれぞれ自治区をもっている。それ以外の省にももし少数民族がいれば、自治州や自治県、自治郷が成立する。甘肅省は漢族人口の多い省であるが、回族の多い臨夏地域は回族自治区となっている。保安族は臨夏回族自治区内で東郷族やサラール（撒拉族）とともに積石山保安族東郷族撒拉族自治県を創って暮している。一方、東郷族は単独で東郷族自治县を州内でもっている。保安族や東郷族の人たちに会うためには、まず臨夏回族自治区の州都、臨夏市に行かなければならない。私を臨夏市へ案内してくれたのは、西北民族大学のツェムデン（才木当）さんである。彼女は甘肅省の西隣、青海省海晏地域の出身である。臨夏市にも友人や教え子が大勢いるから、調査地への案内をお願いした。中国は長いあいだ西欧列強によって殖民地・半殖民地とされてきたためか、外国人や外国に拠点を置く中国出身の研究者は強く警戒されている。そのため、直接民間に入るよりも、必ず政府筋に報告し、誰かの紹介がなければ面倒なことになる。

案内のツェムデンさんとタクシーをチャーターして臨夏市に向かう。運転手は漢人だ。朝の蘭州市の気温はマイナス八度だ。天気予報では晴れとなっているが、空気汚染がひどく、太陽も見えない。

蘭州を離れて西へひたすら車を飛ばす。広河県内に入ったときからモスク（清真寺）が目に見えて増えてくる。回民の姿も多い。広河県は以前に太子寺と呼ばれていた。一八六〇年代に西北一帯を席捲した回民反乱が起こったとき、太子寺周辺では何回も大規模な戦闘がおこなわれた。私はそうした書物のなかの知識を思い浮かべながら、風景を眺めていた。「回民は食べなくても、着なくても、金をモスクに寄付するから、この地のモスクだけは立派だ」と漢人の運転手はいう。確かに甘肅省は中国のなかでも、国民ひとりあたりの収入の低い省だ。そしてこの甘肅省でも広河県は特に貧乏だという。貧乏な地域の人々がなぜ食わず着ずに金を宗教的施設に寄付するか、現実主義者の漢人には理解できないようだ。彼はさらに「だから、やつらは遅れているのだ」と言っ¹⁵て憚らなかつた。

ここでも私は張承志の指摘が頭から離れない。彼は言った。

中国ムスリムは漢族と同じように、この希望のうすい貧窮な地域で生涯をおくっている。一般的にいえば、彼らは隣人としての漢族を羨ましがる必要はない。半飢餓の状態は、イスラム教の食生活のタブーをむしろいっそう聖なるものとさせている。非人道的とも言える性の抑圧や不潔な衛生状態も、割礼と沐浴をおこなう回族にとっては、ある種の神秘的な満足をもたらすものである。水のない寒村では雪を溜めて夏を過ごすのであるが、宗教的な沐浴をかかさぬ回族の家にとっては水の清潔さが何よりも大切なことである。濁った水を鍋にいれて炊事をしている漢族がどうしても理解できないのは、なぜ回族が苦勞してきれいな水を残しては身体を洗うのか、ということである。もっとも重要なことは、つらい日々の仕事のあとで、ムスリムでなければ寢床にあがって灯火を吹き消して眠るほかに何ひとつやることはないようなときに、モスクの闇の中には悠揚として賛美詞を詠む声がただよっていることだ。

もっとも、張承志は水を沐浴と宗教的な行事と結びつけてムスリムの精神世界について書いている。宗教的な精神は日々のすべての行動に反映されている。そう簡単に理解できるものではなからう。

広河県の三甲集を通る。町には「天下第一の市」、「西北第一の市」といった看板（写真1）が見える。昔から商売熱心な地域であるという。ここに集まった商品はさらに西へ、東へと運ばれていく。一九三六年八月にこの地を通った天津『大公報』の若い記者、范長江は塹坪という漢人の村に泊まったときの印象を次のように書きのこしている。¹⁶

この地の居住者は全部漢人ばかりだ。だがその漢人の過半数までは阿片をたしなみ、すっかり中毒してまるで元気がなくなっている。この毒はそもそも中国の前途に重大な傷を残そうとしているのであろうか！この毒を伝播した責任者は、一度でも自分の負うべき罪の重大さを計算したことがあるのであろうか？



写真1 中国西北部の重要な市場のひとつ、三甲集鎮。
その繁栄を支えているのはムスリムたちだ。

范長江は私とは逆の方向、つまり彼は西の臨夏から東の蘭州へと向かっていた。毒を伝播した者の責任の重大さを范長江は批判していたが、数十年たったあとも、状況はさほど変わらな¹⁷い。町の至るところに「吸毒可恥、禁毒光荣」（アヘン吸引は恥で、やめた方が名誉だ）という標語が見られる。あとで分かったことだが、一九九五年に出版された『臨夏市誌』も、一九八〇年代から臨夏市の一部地域でケシの栽培を再開したところがあるのを認める記述をしている¹⁸。地元の栽培以上に、最近では南の雲南省から運ばれてくる麻薬が多いという。東南アジアの「ゴールデン・トライアングル」もこの黄土の大地と繋がっているのだ。

中国には独特な建前と本音の文化がある。それを町の建物に書いてある標語からも読みとれる。「文盲を一掃しよう」、「教育に力をいれよう」と書いている場合、大体その目標が達成されていないことを意味している。麻薬の売買や吸引は腐敗した資本主義国家の現象だ、と社会主義的教育を受けた私たちは昔そう教えられた。社会主義国家にも実は最近、麻薬の氾濫が問題となっているとは、往時の范長江もさぞ嘆いているにちがいな